

47th

Concertino di Kyoto

第47回 コンチェルティーノ ディキョウト 演奏会

2005

11.27 (日)

14:30開演(14時開場)

京都コンサートホール

アンサンブルホール ムラタ

主催 才能教育研究会京都支部

バッハ
ブランデンブルグ協奏曲
第3番

BACH
Brandenburg Concerto
No.3

ベートーベン
大フーガ

BEETHOVEN
Grosse Fuge

ロッシェニ
弦楽のためのソナタ
第1番

ROSSINI
Sonata for Strings
No.1

パイジェルロ
チェンバロ協奏曲
第1番

PAISIELLO
Concerto for Cembalo
No.1

チェンバロ独奏 永田悦子

Cembalo solo Etsuko Nagata

指揮 新井 覚
江村 孝哉

Conductor Satoru Arai
Takaya Emura

コンチェルティーノ ディ キョウト

Concertino di kyoto

才能教育研究会京都支部の最上級生で構成される弦楽合奏団で、昭和34年の結成以来年1回の定期演奏会を開催し、また卒業演奏会において伴奏を担当。過去にモーリス・ジャンドロン(チェロ)ルイ・モイーズ(フルート)フェリックス・アーヨ(ヴァイオリン)といった演奏家と共演してきた。

VIOLIN	山本佳奈	妹尾俊吾	ニヴォン慧里紗	長谷川英司	石上真由子	磯貝碧里
	井狩苑子	上田彩希	大下磋耶	井川恵美子	石田悠	
VIOLA	佐々木めぐみ	江村美由紀	仲佐悦子	佐々木弘明		
CELLO	一楽恒	加藤菜生	森田健二			
CONTRABASS	江刺豊					
FLUTE	坂井満美	石原真衣				
HORN	細見由紀子	垣本奈緒子				
CEMBALO	永田悦子					

バッハ ブランデンブルグ協奏曲 第3番 ト長調 BWV.1048

全6曲から成る合奏協奏曲集で器楽曲の黄金時代であるケーテン時代にケーテンの宮廷楽団 のために作曲したものと考えられ、ブランデンブルク辺境伯に献呈していることから この名で呼ばれている。曲や楽章によって活躍する楽器がいろいろ入れ替わるという まさに楽員の演奏技術の向上のためになり、いい曲をレオポルト公の前で演奏しよう とするバッハの思いから生まれた素晴らしい傑作。第3番は3つのヴァイオリン、3のヴィオラ、3つのチェロ+通奏低音である。

ベートーヴェン 弦楽四重奏曲 「大フーガ」

「大フーガ」は、当初弦楽四重奏曲第13番(Op.130)の最終楽章として作曲された。しかし、楽曲の長さ、難解さから周囲の忠告を聞き入れ、独立した弦楽四重奏曲としてこの「大フーガ」を送り出した。第13番の最終楽章は、また新しく作曲されたものが使用されているが、ときにはベートーベンの当初の意を汲んで、この「大フーガ」が第13番の最終楽章として演奏されることもある。先日、この曲の自筆譜が発見され12月にロンドンのオークションに出品されるそうである。予想落札価格は3億円とか…

ロッシェニ 弦楽のためのソナタ 第1番 ト長調

この「弦楽のためのソナタ」は弱冠12歳の少年の作品。2台のヴァイオリン、チェロ、コントラバスという編成になっている。通常の弦楽四重奏では内声の要となるべきヴィオラを欠いているわけだが、それを逆手にとった作曲技術には驚くばかりである。つまり、第二ヴァイオリンを内声として扱わず、二台のヴァイオリンの対話による二重奏。それに対して、バス・ラインから開放されたチェロと、場合によってはチェロにバス・ラインを任せることのできるコントラバスが二重奏を奏で、二組みの二重奏の組合せによる四重奏、つまり4パートのそれぞれがメロディーの競演をするという珍しい形となっている。彼は生涯に39の歌劇を作曲し、イタリア歌劇作曲家の中でももっとも人気のある作曲家だった。ただし、実質の作曲活動期間は、20年間に満たない。絶頂期には、1年間に3~4曲のペースで大作を仕上げている。殆どのオペラはオペラ・ブッフア(喜劇)であり、大衆やショパンなど同時代の音楽家に非常に人気があった。なお、音楽の世界から身を引いたのは、才能の枯渇や行き詰まりではなくレストランの経営のためであった。

パイジェルロ チェンバロ協奏曲 第1番 八長調

18世紀後半のヨーロッパの音楽世界でもっとも成功し、名声を博したイタリア人作曲家。モーツァルトとも親交があった。モーツァルトがパイジェルロに会ったのは、モーツァルトが、ザルツブルクの大神父と決裂してウィーンに移り住んだ年のクリスマスイヴに皇帝ヨーゼフ2世に宮殿に招かれ、当時ウィーンを訪れていたロシア大公夫妻の前でクレメンティと競演させられるが、このときロシア大公妃から渡されたスコアがパイジェルロのソナタだった。モーツァルトとクレメンティは、パイジェルロのソナタを分担して弾き、さらにそれぞれこのソナタの中の主題を展開して弾いたという。パイジェルロは、ロシアの宮廷に宮廷楽長として招かれて滞在しており、ロシア大公夫妻はパイジェルロの有力なパトロンだった。1783年、モーツァルトは、ウィーンのブルク劇場で、パイジェルロのオペラ「哲学者気取り、または星の占い師たち」の中の「主よ幸いあれ」のテーマをもとに即興で変奏曲を弾いている。1784年、モーツァルトのクラヴィア協奏曲ト長調KV453が、弟子によって初演されたが、モーツァルトは、ウィーンに滞在していたパイジェルロにこれを聴いてもらうために馬車で迎えに行っている。尊敬していたのかどうかはわからないが、一目置いていたことは確かだろう。

チェンバロ

外見はピアノに似ているが、発音の仕組みがピアノとは異なる。ピアノはフェルトで被われたハンマーが弦を叩く打弦楽器。これに対してチェンバロは、プレクトラムと呼ばれる長さ5~8mmほどの小さなツメが弦をはじく撥弦(はつげん)楽器。音色なども全く異なり、キータッチによる音の強弱がつけられない。これを克服するため、レバー操作による強弱2種類の発音メカニズムを備えた楽器も存在し、リュートストップで音色に変化を付けることも可能であり、鍵盤が2段式のものには上下鍵盤が連動する機能をもつ。

